

派遣者番号	管 31K07	氏 名	永嶋 正哉
研究主題 —副主題—	カリキュラム・マネジメントの実現のための年間指導計画表 —ESD カレンダーの活用を通して—		
派遣先	玉川大学 教職大学院	担当教官	笠原 陽子
所属	多摩市立豊ヶ丘小学校	所属長	小畑 行広

キーワード：カリキュラム・マネジメント 年間指導計画表 見える化 活用 構成の工夫

1 研究の背景(目的)・主題設定の理由等

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編では、「各学校においては、教科等の目標や内容を見直し、特に学習の基盤となる資質・能力(言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等)や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成のためには、教科等横断的な学習を充実することや、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められる。これらの取り組みの実現のためには、学校全体として、児童生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育内容や時間の配分、必要な人的・物的体制の確保、教育課程の実施状況に基づく改善などを通して、教育活動の質を向上させ、学習の効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントに務めることが求められる」とカリキュラム・マネジメントの重要性が記された。

カリキュラム・マネジメントについては、学校現場の課題そのものである。教育課程の編成は、年度末に時間をかけて行われていたことが多く、カリキュラム・マネジメントといった意識ではなく、年度末の大きな作業として認識され、教員の「多忙感」へとつながっていることが考えられる。

本研究の目的は、カリキュラム・マネジメントを新たな取組として行うのではなく学校の今までの取組を生かして行うための視点を示すことである。視点を示すことで、学校は、教育活動の計画、実施、評価、改善の過程を可視化、共有、蓄積できるのである。そうすることで、学校全体の教育の質を高められると考えられる。そのためまず、指導に直結する年間指導計画表に着目した。年間指導計画表に「見える化」、「活用」、「構成の工夫」といった視点を入れることで、カリキュラム・マネジメントをスムーズに行うことができるのではないかと考えた。

2 研究の内容・研究の方法

研究の内容として、学校の年間指導計画表に「見える化」、「活用」、「構成の工夫」といった視点を入れたモデルを作成する。学校での検証を通じ、カリキュラム・マネジメントを行うことに対し有効であるかを実証する。

研究の方法としては、①カリキュラム・マネジメントに関連する文献研究、②ESD カレンダーを使用している学校へのアンケート、インタビュー調査、③「見える化」、「活用」の視点を取り入れた年間指導計画表を使用した校内研修を行い、カリキュラム・マネジメントを行うツールとなるかどうかを検証する。年間指導計画表には、教科等横断的な年間指導計画表であるESD カレンダーを使用した。様々な教科等横断的な年間指導計画表がある中、ESD カレンダーを使用した理由として、学校の目標や実態を基に特色ある教育活動を行うことができ、カリキュラム・マネジメントで活用しやすいと判断したからである。

文献研究では、年間指導計画表がカリキュラム・マネジメントの中心となることや年間指導計画表に「見える化」、「活用」という視点が重要であること、指導計画の構成については、目標、評価方法、指導の順とすることで指導内容や方法、児童・生徒の学習に効果的であることが分かった。また、アンケート、インタビュー調査では、年間指導計画表で教科間のつながりが意識できたことや指導方法の改善につながる成果はあったが、計画の改善や教育活動の積み上げまでには至らなかったという課題が見られた。そこで、年間指導計画表は、具体的に「見える化」、「活用」するための構成を次のようにした。①児童の実態、学校の実態、地域の実態、学校の教育目標、目指す児童像、教育内容、身に付けさせたい資質・能力、達成を明らかにする具体的な評価方法、②指導に対する児童の反応、計画や単元開発、授業時数等の改善についての考え方、教育資源といった

構成である。本研究での年間指導計画表は、他の教科等でも活用が可能な構成となっている。

3 研究の結果

年間指導計画表を使用した校内研修の前と後でカリキュラム・マネジメントについてのアンケート（4件法）を行った。アンケート結果については、平均値の差を比較したり、分散分析を活用したりした。

アンケートの分類は、カリキュラム・マネジメントに関わる4点とした。学校の教育目標について、学習指導について、教職員の全体的な雰囲気について、教育課程の編成・実施・評価活動への支援活動の様子についてである。

まず、アンケートの分散分析を行った結果は、アンケートの4点の分類全てで有意差が認められた。分類ではなく、細かいアンケート項目によっては、有意差は見られないものもあったが、校内研修後の全てのアンケート項目において平均値は、概ね3以上といった肯定的な回答を得ることもできた。特に、平均値を1ポイント以上伸ばしたアンケート項目は、「年間指導計画表は、他の学年・学級の単元開発や時数の変更、単元の構成変更等の改善情報を知るための資料になり得ると思う。」「年間指導計画表は、各分掌で教育計画を立てる時にねらいを明確にするための資料になり得ると思う。」の2項目であった。また、0.5ポイント以上1ポイント未満伸ばしたアンケート項目は、次の7項目であった。

- ・ 年間指導計画表は、学校全体の学力傾向やその他の実態や課題について、全教職員の間で共有しやすくなる手だてになると思う。
- ・ 年間指導計画表を活用すれば、学校の特色的かつ創造的な教育課程の編成を行う手だてになると思う。
- ・ 年間指導計画表は、学校の教育目標や重点目標を踏まえた教科等横断的な視点で、教育の内容を組織的に配列するための手だてになっていると思う。
- ・ 年間指導計画表は、実践の良さや成果を記録・蓄積・共有化・継続するための仕組みとしての手だてになっていると思う。
- ・ 年間指導計画表は、カリキュラムに関わるPDCAサイクルを実現するための資料にもなり得ると思う。
- ・ 年間指導計画表は、カリキュラムに関わるPDCAサイクルを実現するための資料にもなり得ると思う。
- ・ 年間指導計画表は、学校が力を入れている実践（特色）を具体的に説明できる資料になり得ると思う。

他のアンケート4項目でも平均値を全て上げることができた。

4 研究の考察

本研究の結果から、カリキュラム・マネジメントは、学校で取り組む新たな課題として0から作り上げるものではないということが分かった。また、学校にある年間指導計画表に「見える化」、「活用」といった視点をもつことや、目標・指導の効果を明らかにする具体的な評価方法から指導計画の構成を組み立てるといったことを行うことにより、カリキュラム・マネジメントを効果的に行うことが実証できた。本研究での年間指導計画表の「見える化」、「活用」、「目標・評価方法を前提とした構成」を行うことで、作成が目的化されてしまいそうな学校の教育計画を学校組織全体の改善や指導内容・方法の改善に生かすためのものとして捉えることができる。さらに、本研究での考え方を学校に取り入れることで、学校の教育活動を蓄積・共有することができ、特色ある教育活動へと展開することができると思う。

5 今後の展望

本研究の発展課題として、年間指導計画表の書き込みの方法や時期、共有の方法がある。年間指導計画表の書き込みや共有については、学年会議や校内研究、校内研修等の時間の活用についての改善を行わなければならない。例えば、学年の教育活動の振り返りを学年会議で行う場合、本研究で示したような指導計画表を活用することで、効果的な振り返りを行い、改善に向けての話し合いを短時間で効率的に行うことができるかどうか、また校内研究の時間を活用し、学校全体で各学年等の教育活動の共有を行うことができるかどうか等について、会議や研究等の時間を計画の共有・改善の時間とし、教育活動の蓄積を効果的・効率的に行うことを検証したい。さらに、職員室の空きスペースに、活用のための年間指導計画表を貼り出したり、教育活動を児童・生徒や地域、保護者に対し可視化するための校内掲示をしたりする方法等を行い、校内外での教育活動の共有とその効果についても検証したい。